

巻頭言

2007.7月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

「稲毛ホワイエ」のこと。

茗溪塾塾長 宇野雅春

1 学期の行事やテストも終了し、学校全体が「夏休み」に向かっています。「夏休みを制するものが受験も人生も制する」というのが今年のキャッチのせいか、「総体」などありながらも、今までにない学習への「勢い」が生徒たちにも感じられます。

そんなこんなで、あわただしい中、先日、我が家には、ちょっとしたサプライズの電話がありました。今から17年も前にお世話になった「稲毛ホワイエ」という民間の「老人介護」ボランティア団体の代表だったNさんからの電話です。

千葉市の会報が何かで妻の名前を見てあまりにも懐かしく電話をしたということでした。当時70才に近い方でしたので今はもう80才を超えています。ご主人を早くになくし、その経験からボランティアに身を投じた方でその当時はいつも、ホワイエの玄関先で優しく私の母を迎えてくれていました。

「あのとき生まれた女の子は、もう大学生ですか？と聞かれた」と妻から報告を受け、とても感慨深い気持ちになりました。今、高3の娘が生まれた時は、塾にとっても大きな転換期でした。そのときは八王子の「セミナーハウス」というところに泊まり込みで、新しい教務方針を決めていました。「特進クラス」が出来たのもこの時です。

夜、会議中に電話が入り、「女の子」であることを知らされ、大喜びをしたのを覚えています。仕事も大変でしたが、当時は小学生を先頭に男の子3人と介護を要する母を抱えていて、今から思えばどうやって乗り越えてきたのかと思うくらい厳しい時期だったと思います。出産を前にして、短期的にあずかってくれるという病院へ母を送ったことは覚えています。その時期がこんな風に重なっていたということはずっかり忘れていました。おそらく穏やかではない様々な確執の渦中であつたらうと思います。

そのとき、ホワイエでは、何か援助ができないかを、色々話し合ったのだそうです。

そこまで気にかけてもらっていたなどということは、当時は全く考えもしませんでした。自分たちのおかれている状況を切り抜けていくだけで精一杯という時期でしたから周りを見る余裕もなかったのだらうと思います。「女の子が無事に産まれたということで、ホワイエではみんなで大喜びしたんですよ。」と当時のことをNさんは語っていたそうです。そんなことを知るよしもなく、その後も2年ばかりはデイサービスを受けていましたが、送り迎えのたびに、小さな娘も大変可愛がっていただきました。小学生の長男が、バスで一人で母を送っていったというもこの「稲毛ホワイエ」です。そんなことから長男が受験に合格したときも、皆で喜んでくれました。

この「稲毛ホワイエ」は稲毛の開業医の方が場所を提供し、老人介護を補う民間ボランティアとして、実際に肉親で介護を経験した主婦達を中心に行ったデイサービスでした。「岩波新書」からもその実践の記録が出版され、私も読ませていただきました。自分たちの辛い経験から生まれたボランティアでしたが、その記録は胸を打つものがありました。今から考えると、どこも受け入れ施設のない状況で、当時行き詰まった私たち夫婦を大きく支えてくれたことに思い当たります。

時代が進み受け入れ施設は大幅に増えました。母を預かってくれる施設が見つかったところとはほぼ同じころ、「稲毛ホワイエ」は閉鎖になりました。

何か言えなかった「お礼」の言葉が今も私の胸には残り続けています。あの当時「ぼけ」という名で身近の人々でさえ理解があつたとはいえない状況下で、「稲毛ホワイエ」の人々だけが本当に母を「人」として扱ってくれたということに対してです。肉親がゆえに優しい言葉をかけることも出来なかった私の未熟を補ってくれたように今は思えます。そのことのお礼をたいてい言えないまま17年も経ってしまいました。Nさん達のささやかに思えた心づくしが今ではとても大きなものに思えています。